

修復できない大被害が

地震などの天災はいまだに予測ができない。移民歓迎政策、はどうか。目先の労働力不足を補う点では有効であるが、外人が増え続けたその後はどうか。マグニチュード7の地震に匹敵する大被害をもたらす。失敗だったと肩を落とすことになる。これが不肖荒田新の予測、いや予感である。

外人による場所と空間の占領

昔、常磐線や総武線の電車に朝早く乗ると大荷物を持ったおばさん達に出会った。千葉県の農家の主婦である。

魚や野菜をぎつしり詰めた籠の上に、風呂敷包みをいくつも積んで縛りつけている。

電車に乗るとそれを座席に置き、自分はその前に立って仲間とお喋りする。地面に置くとき重くつかず上げられないので座席に置く。一人で二人分の場所を占領している。

何十人も乗っている。通路をふさいでいる。一般客はドアのあたりで小さくなっていく。

電車が江戸川を渡り都内に入ると、各駅で数人ずつ降りて行き、上野駅、東京駅へ着く頃はほとんどいなくなる。

こうしたおばさんの得意先は裕福な家である。町の八百屋魚屋より少し高くても新鮮な良質のものを持っている。そうした固定客を持つているので稼ぎは悪くない。毎日重い荷を運ぶ価値があった。

時代の変化とかつぎ手の高齢化で荷を背負ったおばさんの姿は見掛なくなつた。

代わって二人分のスペースをとる別の人が増えはじめた。

やはり早朝の常磐線や京成電車。成田空港から大型トラックを

乗がして乗り込む中国人などの外人旅行者。自分は座席に座って股の間にトランクをはさむ。トランクは通路の半分をふさぎ、向かいにも同じ旅行者がいたら通路は完全にふさがれる。電車の中は歩けなくなる。一般の乗客は、あの野菜売りのおばさんたちの時と同様にドアの付近にかたまっている。

新幹線でも頭上の棚に載らない大きいトランクを通路に置いている外人がいる。荷物置場が満杯で仕方なく手元に置いて置いているのである。乗物の通路は人が通るためにある。乗り降りだけでなく、トイレに行く時や席を求めて移動する時利用する。また、逃げ路、として大事である。火災や刃物を持った狂人が現れた時、逃げ路がふさがれていれば命にかかわる。

経営管理講座 421 染谷和巳

表参道駅から千代田線で金町の自宅に戻るとき、隣の車輦から黒人女性が移ってきて、ドアのそばに立って大声で喋りはじめた。

荒田はその向かいの隅の席に座っていたので距離は二mもない。ケータイ電話で男と話している。男の声も聞こえてくる。

車内での電話だからすぐ終わるだろうと思っていた。終わらない。静かになった。やれやれと思つて女を見つと泣いている。また大声で話し出した。

西日暮里で降りるだろう。降りない。北千住で降りるだろう。降りない。もう三十分近く喋つている。座つている学生や中年女性は知らん顔をしている。内心「うるさいな」と思っているはずだが、

外人による車内空間の占領。これがイヤな予感である。

まだ始まったばかりだが、車内だけでなく町の空間を外人が占領して日本人が排除されていくのではないかとこの予感である。

十一月号に「外人と共生する社会か」を書いた。今回はその続編と

いつていいだろう。

社会の空間を外人にとられるとはどういふことか。これによって日本人と日本の会社はどのような損害を被るのか。

日本の会社は小企業はもとより大企業も家族主義の経営を行っている。

社長が親で社員は子。社長は子を育てて子に幸福な人生を約束し、子は会社に忠誠を尽くして働く。

労働契約による雇用関係はある。これを前面に出して労働時間

や賃金の闘争に明け暮れる人はいる。仕事より労働組合の活動に熱心な人である。こうした人以外は上司や仲間と組織の中で仕事をし、ていくことで幸福な人生を送ることができると考えている。

これからの日本に就職する外国人は短期のアルバイトではない。最低でも五年は勤め、家族帯同でその後も続けて勤めることができる。

五年もいれば日本語堪能になる。日本語が堪能になつてもまだ日本人にはなれない。英語がペラペラでもイギリス人になつたわけではないのと同じである。小泉八雲のラフカディオ・ハーンや「日本の経営」の著作で有名になり日本女性と結婚し日本国籍をとり日本でなくつたジェームス・アペグレンのレベルでようやく「日本人」と認められる。

日本の伝統と文化にほれ込んで、日本人が好きになり、社会に溶け込んで初めて同胞として、家族の一員として遇される。

大半の外人はこのレベルにない。なろうとする努力もしない。自国の文化と伝統を固持し続ける。日本人と一緒に仕事をしながら、異質の空間を維持する。人数が増えればその空間が広がる。広がって日本の会社の家族的つながりを侵食する。団結と意思統一を阻害する。

この現象が顕著になり、会社が底力を失い、異質の空間が広がりが社会にひびが入る、イヤな予感がするのである。

労働力不足は、きつい、きたない、危険の三区の職場で著しい。建設現場、介護の仕事、ホテルの裏方、飲食業界、工場の単純作業、運転手などきつい割に収入が少なく、日本人が務めたがらない職場である。

会社は機械化とロボットの導入で労働力不足を補っているが、人間でないとできない仕事が残る。そこを埋めるのに外国人労働者を雇用する。

空間とは人と人の距離である。会社も社会も人のつながりで成り立っている。ぼんつとひとりいて誰もまわりにいなければ、その空間はその人の独占物になる。人のつながりとは心と心のつながりである。日本人同士は心を許し合う。外人は近くにいても心が離れていて遠い存在である。

そこへ同国の外人が何人も集まってくる。色の違う空間ができがりの邪魔をする。会社であれば指導と管理に手間がかかり神経を

使う。そしていくらか誠意を持つて熱心に指導しても、仕事の改善が見られない。指導者は距離を縮められないことにいらだちを感じ、努力の虚しさを味わう。

社会では通りかかった知らない他人に、心の距離はとるが、外人に対しては遠い距離ではない。外人はそれを感じ同じ仲間を求め

る。外人のかたまりができる。外人による空間の占有の兆候があちこちに現われている。十年後、荒田の予感修復不可能な大被害となつて的中する。

社風と日本の文化伝統の崩壊

「政府が移民・難民の受け入れを推進し規制緩和を続ける現状を鑑みれば、人口の割を外国人が占める日はより早くやってくる可能性が高い」と言い、「移民によって労働力不足は解決しない」と説き、「移民を大量に受け入れれば、今ある社会はすつかり姿を変え、我々は故郷と呼ぶべき居場所を失う可能性がある」と結論している。

この一文に触発されて昨年の

もうひとつ、危険だ、と思つて

社風と日本の文化伝統の崩壊

昨年八月の産経新聞に飯山陽が「日本の『自死』移民推進論が隠す真実」という論文を寄稿している。

「政府が移民・難民の受け入れを推進し規制緩和を続ける現状を鑑みれば、人口の割を外国人が占める日はより早くやってくる可能性が高い」と言い、「移民によつて労働力不足は解決しない」と説き、「移民を大量に受け入れれば、

今ある社会はすつかり姿を変え、我々は故郷と呼ぶべき居場所を失う可能性がある」と結論している。

この一文に触発されて昨年の

もうひとつ、危険だ、と思つて

いることがある。イヤな予感がし